

一つの民族を語らない『三国遺事』壇君*

朴正義**

目次

- 1 はじめに
 - 2 中国の歴史と同時に始まる壇君古朝鮮
 - 3 民族の祖でない『三国遺事』壇君
 - 4 おわりに
-
-

1 はじめに

現在韓国では、韓国古代史を一つの民族の歴史として語る。これは、史実として確かな高句麗・百済・新羅の三国を一つの枠組みで捉えることを意味する。その根拠とは、中世の書『三国史記』『三国遺事』を通し三国を一つの民族として理解し、さらに『三国遺事』に著された壇君を韓民族の祖とすることによって確信するものである。これが、現在の韓国での『三国史記』と『三国遺事』を読む基本姿勢である。しかし、中国を上国とし三国以前を語らない『三国史記』¹⁾が、仏教の普遍的世界観によって著された『三国遺事』²⁾が、果たして一つの民族の歴史を語っているのだろうか。

『三国史記』と『三国遺事』をテキストに沿って読んでいけば、それが一つの民族の

* 이 논문은 2008년도 원광대학교 교내연구비로 연구함

**圓光大学校 日語教育科 日本学 教授

1) 朴正義 「韓日古代神話と中世神話にあらわれた世界観の比較」 日本文化学報 12輯 韓国日本文化学会 2002年 2月 p.p.277~293、 朴正義 「『三国遺事』の世界観」、韓日古代神話と中世神話にあらわれた世界観の比較」 2004年 5月 日本文化学報 21輯 韓国日本文化学会 p.p.203~212

2) 朴正義 「仏教世界観における自己確証」 日本文化学報36輯 韓国日本文化学会 2008年 2月 p.p.361~376

歴史を語っていないことは明白である。ならばなぜ、『三国史記』と『三国遺事』を一つの民族の歴史を語るものとして読んできたのか。これは、中世全体の問題として考えなければならない。つまり、中世の書を総合することによって可能なのである。

既に、拙著「一つの民族を語る中世(1)」³⁾で指摘したように、中国正史は韓半島の国々を一つの枠組みで見ることはない。中国の当方に位置する国々を総して東夷とし、その中で韓半島の国々は別々に扱われている。さらに、これらの国々は中国に教化されることによって、国が興り、中国の支配下におかれる。その象徴が、箕子朝鮮であり、その後の漢の四郡県といえる。新羅の三国統一も、三国統一とせず、高句麗を自国の地方史に組み込み、単なる新羅の拡大政策としかみなさない。むしろ、中国正史は三国の成立自体中国の関与のもとで成立し、元来東夷すべてが中国の地方史であったのが、新羅だけ百済を含んで抜け出た格好になる。中国を中心とする世界観中華思想のもとにすべて中国の支配下にあるという前提の下で著された中国正史にとっては当然のことであろう。

これに対して、やはり拙著「一つの民族を語る中世(1)」で示したように、『三国史記』も一つの民族を語らない。ただ『三国史記』の価値として、中国に対して独自の韓半島を見ようとしたことがあげられる。『三国史記』は、高句麗の始祖朱蒙伝説に加え、中国正史にない新羅の始祖朴赫居世、百済の始祖温祚伝説を加え、三国すべて中国に対し独自の始まりを語る。さらに、中国正史が強調する箕子朝鮮や四郡県を、三国の国家成立とは関係ないものと縮小し載せることによって、韓半島独自の歴史をそこに描いた。しかし、『三国史記』は、そこに三国の民族の同一性にとって必要不可欠な同一祖の存在を示していない。これを満足してくれるのが、三国の祖以前を語る『三国遺事』の壇君神話である。しかし、この壇君が全韓民族の祖として一つの民族の根拠となり得るのか。

2 中国の歴史と同時に始まる壇君古朝鮮

中国正史『漢書』や『三国志』では、韓半島の最初の国として壇君朝鮮でなく箕子朝鮮を挙げ、次のように記した。

『漢書』地理志：箕子去之朝鮮。教其民以禮義。田蠶織作。樂浪朝鮮民犯禁八條。⁴⁾

(現代語訳)箕子は(中国を)去って朝鮮に行き、礼儀や農耕、養蚕や機械を教え、人々を教化した。(箕子は)楽浪や朝鮮の民が守るべき八条の禁制を作った。

3) 朴正義「一つの民族を語る中世(1)」日本語文学36輯 韓国日本語学会 2008年 3月 pp.293~294

4) 『漢書』巻28上 地理志第8下

『三國志』魏書濊伝：昔箕子既適朝鮮。作八條之教。以教之。無門戶之閉。而民不爲盜。⁵⁾

(現代語訳)昔、箕子が朝鮮に行き、八条の教えを作り、(これを)以て人々を教え作り、(これを)以て人々を教え導いた。(教えをうけた人々は)門戸を閉じることせず、また盗みもしなくなった。

これ以外にも箕子の記事は、その後の『後漢書』東夷伝⁶⁾、『後漢書』濊伝⁷⁾、『梁書』東夷伝⁸⁾、『隋書』列伝⁹⁾、『北史』列伝¹⁰⁾、『通典』朝鮮伝¹¹⁾、『通典』東夷伝¹²⁾と『旧唐書』¹³⁾『新唐書』¹⁴⁾までのほとんどの中国正史に見られ、箕子の存在が中国正史において史実として存在し続けてきたと言える。

箕子の記事の主内容は、

- ①東夷に起った最初の国としての箕子朝鮮。→中国周に封じられた国。
- ②朝鮮の地域の人々が八条禁制等によって教化された。→中国の文化の恩恵を受けた。

この二点に集約される。つまり、箕子朝鮮の存在を根拠として、中国正史は韓半島を含

5) 『三國志』卷31 魏書 30 東夷(韓濊伝)

6) 『後漢書』卷85 東夷伝第75 「昔、箕子が殷の衰運を避けて朝鮮に移住した。それ以前の朝鮮の国の風俗については、何も伝えられていない。(箕子)の八条の規約が行われるようになって、(朝鮮の)人々に掟(の必要なこと)を教えた。その結果、村にはみだりに盗むものがなく、(家々は)夜も門に閉める必要がなく、(箕子以前には)頑迷無知な風俗によっていた人々も、ゆつりとだまかな法に従うようになった。(この法は)七、八百年も続き、それゆえ東夷(諸種族)は、一般に穏やかに行動し、こころに謹むことを慣習としている」。

7) 『後漢書』卷85 東夷伝第75 濊伝 「昔、(周の)武王が、箕子を朝鮮(侯)に封じた。箕子は(この地方の人達)に礼儀・耕作・養蚕を教え、また八条の教えを制定した。(そのため)この地方の人達は、窃盗をせず、(夜でも)門戸を閉じることなく、婦人は貞節で、食事をするのに籩豆(正式な器)を用いる」。

8) 『梁書』卷54 列伝第48 諸夷東夷伝 「東夷の国では、(まず)朝鮮が国を作った。箕子の教化を受け、その器物には礼楽(に用いられたもの)があったという」。

9) 『隋書』卷81 列伝46 東夷伝 「(周王朝の初めに)箕子が朝鮮に逃れたとき、はじめてこの地に八条の禁令を示した。(その禁令は)数こそ少ないが疎漏がなく、簡単ではあるが(悪を)とどめることができる。(箕子の数)化は(人々に)感化を与え、(その感化は)千年もの後にも絶えることがなかった」。

10) 『北史』卷94 列伝82 東夷伝 「夏王朝や殷王朝の時代には、ときには(九夷から)王がやって来たときもある。(周王朝のはじめに)箕子に逃れたとき、はじめて(箕子がこの地に)八条の禁令を示した。(その禁令は)数こそ少ないが疎漏がなく、簡単ではあるが(悪を)とどめることができる。(箕子の数)化は(人々に)感化を与え、(その感化は)千年もの後にも絶えなかった」。

11) 『通典』卷185 邊防1 東夷上 朝鮮伝 「朝鮮は周(の武王)が殷の太師[三公のうち最も尊貴である官職](であった箕子)を封じた国である。太師(箕子)は礼儀及び農耕・養蚕(の業)をもって(人々)を教化し、(人々が遵守すべき)八条の教令を作ったので、門戸を閉ざさなくても窃盗をする者などいなかった」。

12) 『通典』卷185 邊防1 東夷上朝鮮伝 「周王朝のはじめ、商(殷)の太師(箕子)を封じて、朝鮮に国を作らせた」。

13) 『旧唐書』卷199上 列伝第149上 東夷高麗伝

14) 『新唐書』卷220 列伝第145 東夷高麗伝

め東夷が中国の勢力によって始まり教化されたことを説くのである。さらに、箕子朝鮮の後裔である朝鮮王準の話が『三国志』韓伝に続く。

『三国志』魏書濊伝：其後四十余世。朝鮮侯準僭号称王。15)
(現代語訳)箕子の後、四十余代目の朝鮮侯準は、勝手に王を称した。

『三國志』魏書韓伝：侯準既僭號稱王。爲燕亡人。滿所攻奪。將其左右宮人走入海。居韓地。自號韓王。(魏略曰：其子及親留在國者。因冒姓韓氏。準王海中。不與朝鮮相往來)。其後絶滅。今韓人猶有奉其祭祀者。16)

(現代語訳)(朝鮮)侯の(箕)準は、以前から勝手に王を称していたが、燕からの亡命者である衛滿に(国を)攻め奪われてしまった。(朝鮮王準は)身近に仕える宮人を率いて逃れ、海に出て韓族の地域に(入り、そこに)住み着き、自ら韓王と称した。

『魏略』は(次のように)に伝えている。準の子や親(族)で(逃亡せずに朝鮮)国に留まっていた者が、(準の一族であることがばれない)ようにするため、姓を韓始と詐った。準は海(外の国)を支配し、朝鮮と往来しなかった。(準の子孫は)その後、絶滅してしまったが、韓では今なお準の祭祀を信奉する人々がいる。

これ以外にも王準の記事は、『後漢書』濊伝17)、『宋書』禮二18)、『通典』弁辰伝19)などにも見られる。内容は、「箕子の後裔朝鮮王準が、衛滿朝鮮の成立と同時に南に逃れ韓王となるが、その後王準の子孫が途絶え、その国を原住民が国を支配する」であるが、朝鮮王準の記事の要点は三点、

- ①箕子の後裔朝鮮王準が南に逃れ韓王となる→南の地も箕子の子孫によって開かれる。
- ②準王の子孫が途絶える→その地は後に南の住民によって支配される。

さらに、重要な一点として、「韓では今なお準の祭祀を信奉する人々がいる」に注目すべきである。つまり、準時代の統治のよきによって、後々原住民によって慕われたといえ、その結果、

- ③準王の祭祀を信奉する→南の地も準王によって教化された。

このように、中国正史は、韓半島は南北全て中国の勢力によって開かれ教化されたという。即ち、中国は、箕子朝鮮の存在によって、中国が韓半島を開き教化した根拠をえ、そして、その後も韓半島における宗国としての位置を確保しえるのである。

しかし、この箕子朝鮮が史実であるのか。白鳥庫吉は早くも明治43年(1910年)に「檀

15) 『三国志』卷31 魏書 30 東夷(濊伝)

16) 『三国志』卷31 魏書 30 東夷(韓伝)

17) 『後漢書』卷85東夷伝第75 濊伝 「箕子の後四十余世の孫である準の時になって、王号を自称した」。

18) 『宋書』卷15 志第5 禮二

19) 『通典』弁辰伝 「初め朝鮮王(箕)準が衛滿のため打ち破られたとき、残余の人々をひきいて海上に逃れ、馬韓に攻め入り、みずから立って韓王となる。(箕)準の後(裔)は絶滅し、馬韓人が自ら立ち辰王となった」。

君考」において箕子朝鮮自体を否定し、その時期を中国植民地時代とした²⁰。現在も村上四男氏は箕子朝鮮の存在を否定し、その根拠として「司馬遷は『史記』を著して、箕子の伝説を宋世家に記しながらも朝鮮伝に載せなかったのは、箕子の朝鮮の事実を歴史的事実と認めなかったからであろう。また後漢初に、班固らによって撰せられた『漢書』でも、やはり箕子の伝説を地理志に載せながら、その朝鮮伝は『史記』朝鮮伝をほとんどそのまま襲用しているにもかかわらず、箕子朝鮮には何も記していない」と述べ、さらに、箕子朝鮮伝説が韓国において盛んになった理由として、「朝鮮は、中国の賢人箕子の建てた国である故に、後世の半島では光栄なことと考え、特に儒学が盛んになるや、箕子尊崇の念はいよいよ昂まった」と説いた。²¹

一方韓国でも、李基東が「檀君神話が韓民族自尊心と自主的精神を象徴するものに比べ、対照的な位地から漢民族の勢力を背景にして生まれたのが箕子伝説だ²²と述べるように、韓民族の自尊心問題として戦前戦後を通じて箕子の存在は否定され続けた。李丙寿氏は、箕子の冊封・東來が信じがたいと、「年代上から見て、周武王十三年は周が殷を克服したというが、その当時東走した箕子が同年にまた遠距離を跋涉し周に入朝することができるか。それだけでなく、周の釈放に対しても良く思わず東走した箕子がその後、周の冊封を受け臣礼をつくして入朝するのは常識では考えられない」と中国正史の矛盾点を多く挙げ箕子朝鮮の存在を否定した²³。金貞培氏は、「殷周の交代時期である紀元前12世紀末から11世頃に²⁴、古朝鮮が生じていたとは考えられない²⁵と、箕子朝鮮を否定した。さらに、李基東は、「考古学的観点から、衛満朝鮮以前の時期において、大同江流域に漢族の植民地国家が存在したことを認めるほどの根拠がなく、韓半島の青銅器文化はシベリア北方文化の要素が圧倒的で、漢族の鉄器文化が大同江流域に展開されたのは大体紀元前300年以後だ」とし、やはり箕子朝鮮の存在を否定した²⁶。

ここで、李丙寿氏はこの箕子朝鮮伝説の意味を他の角度から理解し、古朝鮮社会の発展過程での王室の交代の可能性を示唆した。これは古朝鮮の存在を認めた上で箕子

20)白鳥庫吉「檀君考」(『朝鮮研究史』白鳥庫吉全集第三卷) 岩波書店1970年3月 p.p.500~503 初版明治43年(1910)8月
21)「箕子が朝鮮に逃れたという伝説は、……源義経が……大陸に渡って……ジンギス汗となったように英雄の死を惜んだ流転伝説のたぐいで、中国人の南満州から朝鮮半島への移住植民の歴史的事実を反映して、賢人箕子の事跡に集約せしめたものと見られる」として否定している(村上四男『朝鮮古代史研究』開明書院 1978年3月 p.p.534~535)

22)李基東 李基白『韓國史講座1 古代篇』一潮閣 2001年3月(1982年8月) p.45

23)李丙寿「箕子朝鮮の正体と所謂箕子八条教に対する新考察」(『市村記念東洋史論叢』1933年；『韓國古代史研究』博英社 1984年3月(1975年9月) p.p.47~56)

24)この年代は従来『皇極經世曆』により紀元前1122年とされていたが、薰作賓の紀元前1111年の説をはじめとして、陳夢家の紀元前1027年説、または新城新蔵の1066年説などいくつかの新説があるが、現在は大体西洋の学界では紀元前1027年説を、日本の学界では1066年説が採られている。(李基東 李基白『韓國史講座1 古代篇』一潮閣 2001年3月(1982年8月) p.45)

25)金貞培『韓國民族文化の起源』高麗大學校出版部 1973年2月 p.p.180~185)

26)李基東 李基白 前掲書 p.45

朝鮮を見るもので、さらに中国正史が説く朝鮮箕子始祖説をも否定するものである²⁷⁾。これを支持する学者は現在も少なくない。しかし、『三国遺事』古朝鮮条は

周虎{武}王即位己卯。封箕子於朝鮮。壇君乃移於藏唐京 後還隱於阿斯達爲山神。壽一千九百八歲。²⁸⁾
 (現代語訳)周の武王が即位した己卯年(B.C.813年)に、箕子を朝鮮に封じると、壇君は藏唐京に移り、後に阿斯達にもどってきて隠れて山の神になった。寿命が1908才であった。

「周虎{武}王即位己卯。封箕子於朝鮮」と、壇君と箕子のつながりをはっきりと否定している。箕子朝鮮をして壇君の古朝鮮を引き継ぐとするのは、後で述べる『帝王韻記』にでている「後朝鮮祖是箕子」という記事からの類推であり、即ち、壇君朝鮮＝前朝鮮を前提として箕子朝鮮＝後朝鮮とする『帝王韻記』からの類推であり、『三国遺事』の問題ではない。

現在、箕子朝鮮は韓日の学者において否定されており、中国正史が記す中国の勢力によって韓半島が開かれ教化されたという根拠は存在しない。しかし、このような論理の展開がなかった中世において、『三国遺事』は、中国正史が示す「箕子によって韓半島が開かれ教化された」とする大前提をどのように克服したのか。

『三国遺事』は箕子朝鮮を歴史の1ページとして明確に記録するが、韓半島の始りを『古記』と『魏書』を引用して箕子朝鮮より早い壇君朝鮮の建国をあげ、中国の勢力によって韓半島が開かれたことを最初に否定する。しかし、『古記』は現在残っておらず、また『魏書』には壇君の記事は見られない。このため、日本では白鳥庫吉氏以来「壇君捏造説」²⁹⁾が唱えられたが、韓国では古くから崔南善などが「『魏書』というのは、現在残っている『魏書』だけでなくその他にもあり、さらに『古記』を引用する部分にさらに詳しく記載されており、現在に残っている『魏書』に記載されていないといっても問題ではない」³⁰⁾と主張し、今も論点となっている。確かに、中国正史には壇君の記事はないが、箕子朝鮮以前に国があったことを示す記事がある。

『梁書』東夷伝：東夷之國。朝鮮爲大。得箕子之化。其器物猶有禮樂云。³¹⁾
 (現代語訳)東夷の国では、(まず)朝鮮が国を作った。箕子の教化を受けた。その器物には礼楽(に用いられたもの)があったという。

27)李丙寿「箕子朝鮮の正体と所謂箕子八条教に対する新考察」(『市村記念東洋史論叢』1933年；『韓国古代史研究』博英社 1984年3月(1975年9月) p.p.44~47)

28)『三国遺事』卷一 紀異第一 古朝鮮条

29)白鳥庫吉 前掲書 p.p.500~503

30)金延鶴「壇君説話とトテムズム」(李恩奉『壇君神話研究』オンヌリ(은누리) 1986年3月 p.66)

31)『梁書』卷54 列伝第48 諸夷東夷伝

ここにおいて「朝鮮が国を作った」で、箕子が国を作ったとは記されていない、「箕子の教化をうけた」から、朝鮮国が建国された後、箕子が朝鮮に行って教化したと読める。さらに、

『隋書』列伝：夏殷之代。時或來王。暨箕子避地朝鮮。始有八條之禁。³²⁾
(現代語訳)夏王朝や殷王朝の時代に、時には王がやってきたこともある。(周王朝の初めに)箕子が朝鮮に逃れた時、はじめてこの地に八条の禁令を示した。

これと全く同じ記事が、『北史』にも見られる。

『北史』列伝：夏殷之代。時或來王。暨箕子避地朝鮮。始有八条之禁。³³⁾
(現代語訳)夏王朝や殷王朝の時代に、時には(九夷から)王がやってきたこともある。(周王朝の初めに)箕子が朝鮮に逃れた時)、

これらの記事は箕子が朝鮮に行く前に「朝鮮から王がやってきた」といっており、それも檀君朝鮮成立時の殷時代で、これからすでに朝鮮に王国が成立していたことになる。以上の記事は箕子朝鮮以前に国家が成立していたことを示すと言える。一然は、この箕子以前の国を、その時代民衆の間で広まっていた檀君神話³⁴⁾と結びつけ、『三国遺事』において檀君朝鮮と具体化したのではないだろうか。しかし、これに関しての確証はなく、単なる推論でしかないので、ここではこれ以上語らないことにする。

『三国遺事』にみられる箕子朝鮮の記事を今一度記すと、

檀君王儉。以唐高{堯}即位五十年庚寅[唐堯即位元年戊辰。則五十年丁巳。非庚寅也。疑其未實。]。都平壤城[今西京]。始稱朝鮮。又移都於白岳山阿斯達。又名弓[一作方]忽山。又今彌達。御國一千五百年。周虎{武}王即位己卯。封箕子於朝鮮。檀君乃移於藏唐京。後還隱於阿斯達爲山神。壽一千九百八歲。³⁵⁾
(現代語訳)檀君王儉は、唐堯が即位してから50年たった庚寅に、平壤城に都し、はじめて朝鮮と呼び、また都を白空岳山の阿斯達に移した。そこを弓忽山、または今弥達ともいう。国を治めること1500年間であった。周の武王が即位した己卯年(B.C.813年)に、箕子を朝鮮に封じると、檀君は藏唐京に移り、後に阿斯達にもどってきて隠れて山の神になった。寿命が1908才であった。

32) 『隋書』卷八十一 列伝第四十六 東夷(史曰)

33) 『北史』卷94 列伝第82列伝

34) 檀君神話と箕子伝説は、高麗時代の階級を代表する二大思潮といわれている。檀君神話は、1231年からはじまるモンゴールの侵入に対抗する全国的な農民義兵闘争を基盤とする被支配階級の民族主義的な思潮である。これに対し、箕子朝鮮伝説は、新羅儒学の伝統を継承する高麗時代の儒学家たちが、中国の賢人と崇拜する箕子を礼讃する支配階級の儒教思潮である。継承というより、相対する思想の下で伝承されたものである。(井上秀雄(1972)『古代朝鮮』NHKブックス p.20)

35) 『三国遺事』卷一 紀異第一 古朝鮮条

ここに箕子が朝鮮の民を教化したという内容はなく、その後も箕子の記事はみられない。
『三国遺事』は、天帝の子桓雄の降臨によって仏教の教化が始まるのであって、これに相反する儒教に彩られた箕子の教化は『三国遺事』とは矛盾するものである。儒教に彩られた『三国史記』が宝蔵王条に、

論曰。玄菟樂浪本朝鮮之地。箕子教民。以禮礼義田蠶織作。設禁八條。³⁶⁾
(現代語訳)論じていう、玄菟・楽浪はもと朝鮮の地で箕子の封じた所である。箕子は民に礼儀、耕作、養蚕、織物造りなどを教え、八条の禁法を設けた。

と、箕子の教化の記事を載せているのとは異なる。

『三国遺事』は、箕子朝鮮より早い檀君朝鮮の存在を記すことによって、韓半島が中国の勢力によって開かれたという中国正史に著された韓国古代史の大前提を否定した。しかし、『三国遺事』がこの檀君を韓民族全体の祖と描いているのか、そして一つの民族観を持ち得たかは別問題である。

3 民族の祖でない『三国遺事』檀君

李載浩氏は、『三国遺事』紀異篇に古朝鮮を筆頭として衛満朝鮮、馬韓、辰韓、弁韓、五伽倻、北扶餘、高句麗、新羅、百濟、駕洛国などの建国亡国が順に載せられているのを見て、「即ち、紀異篇にこのような範囲を設定したのは、筆者の意図を我が民族の建国始祖を考え、南北各部族国家と高句麗 新羅・百濟三国を全て檀君の後裔である同一民族という概念から総括したものと認定される」³⁷⁾と指摘した。これが、現在の『三国遺事』を読む姿勢であり、ここに、一つの民族の根拠としての『三国遺事』檀君が誕生する。しかし、古朝鮮後、韓半島に誕生した国々の系統を考えず、最初に檀君が登場したから、その後のすべて檀君の後裔とするのは納得できない。

また、金泰泳氏は『三国遺事』を語り、その韓国古代史の系統を「古朝鮮→衛満朝鮮→扶余・馬韓と受け継がれた国史の系統を、その後三国時代が引き継ぐ」³⁸⁾と主張したが、この見解は韓国において多く見られ、李基白などが主張する三朝鮮観³⁹⁾にも通じるも

36) 『三国史記』卷第二十 高句麗本紀第十 宝蔵王条

37) 李載浩「三國遺事にあらわれた民族自主意識」(民族文化研究所編『三國遺事研究上』嶺南大學出版局 1984年6月(1983年8月) p.5)

38) 金泰泳「三國遺事に見る一然の歴史認識に對して」(李佐成・姜万吉篇『韓國の歴史認識上』創作と批評社 1999年2月(1976年11月) p.142)

39) 李基白氏の三朝鮮観を整理すれば、古代三朝鮮一檀君朝鮮・箕子朝鮮・衛満朝鮮一の古代史の展開は、韓国固有の城邑国家として檀君朝鮮が形成され、その後周辺の城邑国家を吸収合併し、隣接する燕国と覇権を争うほどの強大連盟王国として発展する。この間、箕子朝鮮への王朝の交替がみられるが、これはどこまでも檀君朝鮮の

のである。しかし、『三国遺事』においては納得できるものではない。金泰泳氏のいう古朝鮮は、壇君朝鮮と箕子朝鮮を合わせたものであるが、『三国遺事』古朝鮮条では、

周虎(武)王即位己卯。封箕子於朝鮮。壇君乃移於藏唐京 後還隱於阿斯達爲山神。壽一千九百八歳。40)(現代語訳)周の武王が即位した己卯年(B.C.813年)に、箕子を朝鮮に封じると、壇君は藏唐京に移り、後に阿斯達にもどってきて隠れて山の神になった。寿命が1908才であった。

「周王が箕子を朝鮮に封じ、そのため壇君は隠れて山の神になった」と、箕子は周王に封じられ朝鮮にやって来て、壇君を追い出したのであって、その繋りは明確に否定される。箕子朝鮮をして壇君の古朝鮮を引き継ぐとするのは、壇君朝鮮＝前朝鮮を前提として箕子朝鮮＝後朝鮮とする『帝王韻記』下巻東国君王開国年代の「後朝鮮祖是箕子」という記事からの類推であり、『三国遺事』の問題ではない。

衛満朝鮮に関しては『三国遺事』魏(衛)満朝鮮条に、

燕王盧綰反入匈奴。燕人魏満亡命。聚黨千餘人。東走出塞。渡淇水。居秦故空地上下障。稍役屬眞番朝鮮蠻夷。及故燕齊亡命者。王之。都王儉。41)(現代語訳)燕王盧綰が(漢)にそむいて匈奴がわにつくと、燕人の魏(衛)満が亡命して、部下1000人を集めて東の方へ逃げていって塞を出、淇水を渡り、秦の古い空き地である上下の要塞に住み着き、次第に眞番 朝鮮の蛮夷と、燕と齊の亡命者たちを支配しながら王となって王儉に都した。

と、燕からの亡人衛満が中国の移住民を基盤として建てた国と『三国遺事』は明記しており、壇君朝鮮そして箕子朝鮮にも繋がらない。また、壇君朝鮮 箕子朝鮮 衛満朝鮮を合わせて古朝鮮とする李基白氏の三朝鮮観も『三国遺事』の問題ではない。

さらに、衛満から扶余のつながりも見られない。これは、中国正史でも見られないものである。そして、馬韓とのつながりは、『三國志』魏書韓伝の記事

將其左右宮人走入海。居韓地。自號韓王。…………其後絶滅。今韓人猶有 奉其祭祀者。42)(現代語訳)(朝鮮王準は)身近に仕える宮人を率いて逃れ、海に出て韓族の地域に入り、そこに住み着き、自ら韓王と称した。…………準は海(外の国)を支配し、朝鮮と往来しなかった。(準の子孫は)その後、絶滅してしまったが、韓では今なお準の祭祀を信奉する人々がいる」。

継承とみ、古朝鮮の発展段階といえる韓民族が主体の国家と規定している。この朝鮮王朝の衰退とともに中国の影響を背景に衛満朝鮮が形成される。しかし、この王朝も征服王朝の性格をもつものではなく、朝鮮の土着民の協力によって形成された国家で、やはり根本は壇君王朝を引き継ぐものと考えた。つまり、この三朝鮮を一つの繋がりとも、合わせて古朝鮮とも呼んでいる。(李基白著;宮原兎一・中川清訳『韓国史新論』清水弘文堂書房 1971年1月p.29)

40)『三国遺事』卷一 紀異第一 古朝鮮條

41)『三國遺事』卷一 紀異第一 魏満朝鮮條

42)『三國志』卷31 魏書 30 東夷(韓伝)

「朝鮮王準の南下して国を建てた」を指摘したものと思われるが、このつながりは衛満とのつながりでなく箕子朝鮮とのつながりで、しかも中国正史の問題である。金泰泳氏がいう国史としての檀君系統は、『三国遺事』のテキストに則ったものではない。

井上秀雄氏は、「朝鮮諸国の開国神話の系統をたどってみると、北方諸民族に多い獣祖神話や、中国の漢族に多い日光感精神話、アジアモンスーン地帯を中心とする卵生神話、東アジア太平洋地域に多い箱船漂流神話および降臨神話など多様性を示す」と指摘した⁴³⁾が、これらの始祖神話全てが『三国遺事』に凝縮されている。ここから、「桓雄降臨」からはじまる始祖神話を、一つの民族の系統神話としてまとめるのは無理がある。韓国でも、柳東植氏や趙芝薫氏など『三国遺事』に載せられている始祖神話の多様性を指摘する⁴⁴⁾⁴⁵⁾が、そこから『三国遺事』が一つの民族を示していないという展開には至っていない。ここに、三国の始祖と檀君の繋がりを『三国遺事』はどのように語っているかを検討するによって、『三国遺事』が一つの民族の系統を示さないことを指摘したい。

3-1 明確でない扶余系統(高句麗・百濟)の檀君継承

文定昌は自己の著『韓国古代史上』「第 6 章扶余国」の「第 1 檀君朝鮮時代の扶余」の最初に「『葵園史話』によると、檀君に夫妻・夫蘇・夫虞 扶余の四人の息子がいたが、」⁴⁶⁾と、扶余が檀君を継承したことを確認する。これ以後、北部においては、これが定説として受け入れられてきた。しかし、これらは朝鮮時代の書『葵園史話』や『東史綱目』などの書を引用してのことで、『三国遺事』の問題ではない。

では、『三国遺事』においてはどうか。まず、檀君と扶余系統の関係を見る前に、扶余系統を整理すると、檀君朝鮮の後、北扶余条に、

「三國遺事」北扶余條：天帝降于訖升骨城[在大遼醫州界]乘五龍車。立都稱王。號北扶餘。自稱解慕漱。生子名夫妻。⁴⁷⁾(現代語訳)『古記』のいうには、『前漢書』に、宣帝の神爵三年壬戌(B.C.59年)四月八日、天帝が訖升骨(升紇骨)城[大遼の医州の地にある]に降りてきて、五龍車に乗り、都を定めて王と称し、国号を北扶余とし、自ら解慕漱と名のり、子を生んで、夫妻と名付けた。

43)古朝鮮の檀君神話は獣祖神話、桓雄降臨や新羅・加羅の始祖神話は降臨神話、さらに新羅・加羅の始祖神話には卵生神話の要素が含まれている。また、高句麗の始祖神話は日光感精神話、新羅の第四代王昔脱神話は箱船漂流神話(井上秀雄『實証 古代朝鮮』NHKブックス 1992年1月 p.p.47~49)

44)柳東植「始祖神話の構造」(李恩奉『檀君神話研究』オンヌリ(온누리) 1986年3月 p.p.99~116)

45)趙芝薫「東方開國説話攷」(李恩奉『檀君神話研究』オンヌリ(온누리) 1986年3月 p.p.217~238)

46)文定昌『韓国古代史上』柏文堂 1979年10月(1971年12月) p.113

47)『三國遺事』卷一 紀異一 北扶餘條

と、古朝鮮後、中国勢力の影響を受けず韓半島独自に生まれた国として北扶余が登場する。天帝自らが降りてきて、解慕漱と名乗り北扶余を開いた。さらに、北扶余建国後、解慕漱は子解夫妻をもうけるが、この解夫妻は東扶余条に

『三国遺事』東扶余條：北扶余王解夫妻之相阿蘭弗。夢天帝而謂曰。將使子孫立國於此。汝其避之〔謂東將與之兆也〕。東海之濱。有地名迦葉原。土壤膏腴。宜立王都。阿蘭弗勸王移都於彼。國號東扶余。48)(現代語訳) 北扶余の王、解夫妻の宰相阿蘭弗が夢を見るに、天帝が降りてきて、「これから我が子孫にここに国を立たせるつもりだから、おまえたちはこれを避けよ(これは東明が興ろうとする兆しを謂う)。東海のほとりに迦葉原という所があって土地が肥えているから、王都にするとよい」と言った。阿蘭弗が王に勧めて都をそこに移し、国号を東扶余とした。

と、天帝の「東明が北扶を治める」という命によって都を移し、東扶余を開国する。そして、天帝の命の通り東明が高句麗を建国すると、北扶余条にある。

『三国遺事』北扶余條：東明帝繼北扶余而興。立都于卒本州。爲卒本扶余。卽高句麗之始。49)(現代語訳) 東明帝が北扶余を継いで立ち。都を卒本州に定め、卒本扶余となったが、即ち高句麗の始祖である。

ここで、東明が高句麗の始祖であり、しかも天帝の子孫であることが最初に確認され、北扶余を受け継ぐ。しかし、もとは東扶余に生まれたと、『三国遺事』高句麗条50)にある。

『三国遺事』高句麗條：得女子於太白山南優渤水。問之云。我是河伯之女。名柳花。與諸弟出遊。時有一男子。自言天帝子解慕漱。誘我於熊神下。鴨渌邊室中知之。而往不返。……………爲日光所照。引身避之。日影又付逐而照之。因而有孕。生一卵。……………置於暖處。有一兒破殼而出。骨表英奇。年甫七歲。岐嶷異常。自作弓矢。百發百中。國俗謂。善射爲朱蒙。故以名焉。(現代語訳) 太白山の南優渤水で一人の女に出合った。問うと、「私は河伯之の娘で、名は柳花です。大勢の弟と遊んでいる時、一人の男が現れて、自は天帝の子解慕漱だといひ、私を熊津山の麓にある鴨渌江の辺りの家の中に誘い込み、密かに通じてから、出ていったまま再び帰って来ません。……………」。……………日光が(女がいる)所を照らしたので(女が)身を避けると、日が追ってきてまた(女)を照らした。それで身籠り、一個の卵を生んだ。……………暖かい所に置くと、(その中から)一人の男児が殻を破って出てきた。骨格と外観が人よりも飛び抜けて優れていた。年わずか七歳でもはや成長し、凡人とは違って、ひとりて弓を作り、(弓を射れば)百発百中の腕前であった。国の風俗によく矢を射る者を朱蒙といっただので、それを名前にした。

48) 『三国遺事』卷一 紀異一 東扶余條

49) 『三国遺事』卷一 紀異一 北扶余條

50) 『三国遺事』卷一 紀異一 高句麗條

朱蒙は天帝の子と河伯の娘との間にできた子として、天帝の孫であることが確認される。では、北扶余と東扶余の関係はどうなるか。東扶余の解夫妻は解慕漱(天帝)の子であり、朱蒙と伯父と甥の関係になる。解夫妻を継いだ金蛙は神秘的な生をもつが、解夫妻の実子でなく天帝との血の繋がりはなく、金蛙の実子帯素も当然天帝との血は繋がっていない。天帝の系統でない金蛙→帯素より、天帝の系統である朱蒙→子孫が正統性がある。これは、天帝の命「これから我が子孫にここに国を立たせるつもりだから、おまえたちはこれを避けよ」と対応する。結果、帯素は高句麗の第三代無恤王によって伐たれ、そして国は滅びる(22年)⁵¹⁾。これにより、解慕漱(天帝)→解夫妻→金蛙→帯素の系統は消滅し、扶余全体を朱蒙が開いた高句麗が引き継ぐ。

さらに、この高句麗始祖朱蒙の繋がりとして、百済が成立する。『三国遺事』卞韓百済条に、

而唐書云。卞韓苗裔在樂浪之地云者。謂温祚之系・出自東明故云耳。⁵²⁾(現代語訳)『唐書』に卞韓の子孫が樂浪の地にいたというのは、温祚の系統が東明(王)から出たから、そのようにいっているのである。

となっており、東明王は高句麗の始祖朱蒙を意味するので、百済の始祖温祚も天帝の系統である。

さらに、系統を示す姓から考えた場合、北扶余の解慕漱と東扶余の解夫妻は言うまでもなくその姓は「解」。そして高句麗の朱蒙については『三国遺事』高句麗条の割り注に、

「國號高句麗。因以高爲氏[本姓解也。今自言是天帝子承日光而生。故自以高爲氏]⁵³⁾(現代語訳)国号を高句麗と称し、よって高を氏とした(本姓は解であるが。今自分で天帝の子であり、日光を承けて生まれた、といっているから、高をもって氏としたのである)。

とあり、高句麗王朝のの元の姓は「解」。百済の王朝の姓は、『三国遺事』南扶余前百済条⁵⁴⁾に、

51) 『三国遺事』卷一 紀異一 東扶餘條 「乃收而養之。名曰金蛙。及其長。爲太子。夫妻薨。金蛙嗣位爲王。次傳位于大(太)子帶素。至地皇三年壬午。高麗王無恤伐之。殺王帶素國除。:(解夫妻は)引き取って育て、名を金蛙といった。長じては太子とし、解夫妻がなくなった後は、金蛙が位をついで王となった。次に位を太子の帯素に伝えた。地皇(王莽の年号)三年壬午に、高句麗王、無恤(大武神王)が王の帯素を伐って殺し、國も滅んでなくなった」

52) 『三国遺事』卷一 紀異一 卞韓百済條

53) 『三国遺事』卷一 紀異一 高句麗條

54) 『三国遺事』卷一 紀異二 南扶餘・前百済條

其世系與高句麗同出扶餘。故以解爲氏。55)(現代語訳)：(百済の)世系は高句麗と同じく扶余から出ているために、氏を解といった。

と、百済は高句麗から出たので、元々の姓は「解」であった、と記されている。百済も朱蒙の子孫であることから、『三国遺事』においては当然なことである。ここまでを整理すると、

↑百済→

北扶余：解慕漱(天帝)→(子)→高句麗：朱蒙(東明)————→
↳東扶余：解夫妻→金蛙→帶素→消滅

図のように、『三国遺事』は扶余と高句麗・百済を天帝の血を引く一つの系統と著わしている。

ならば肝心の壇君と朱蒙との関係はどうなるのか。

壇君と朱蒙の関係を本文でなく、王暦の記事

高句麗 第一東明王。甲申立。理十八。姓高。名朱蒙。一作鄒蒙。壇君之子56)
(現代語訳)姓は高。名は朱蒙。一名は鄒蒙。壇君の子である

と、ここでは朱蒙は壇君の子と明記している。しかし、肝心の本文には、壇君と朱蒙の関係を示す記事がただ『三国遺事』高句麗条に、それもの割り注に一つだけある。そこには、

壇君記云。君與西河河伯之女要親。有産子。名曰夫妻。今按此記。則解慕漱私河伯之女而後産朱蒙。57)(現代語訳)『壇君記』には壇君が西河の河伯の娘と親しくなって子を産み夫妻と名付けた、とあるが、今この記事には解慕漱が河伯の娘とひそかに通じてから朱蒙を生んだとなっている。

崔柄憲氏は、これらの記事をして根拠として、「古朝鮮と高句麗の歴史的継承関係が成立している」58)と説いた。しかし、『三国遺事』高句麗条の割り注に出ている関係を図で表わすと、

55)『三国遺事』卷一 紀異二 南扶余・前百済條

56)『三国遺事』王暦一

57)『三国遺事』卷一 紀異一 高句麗條

58)崔柄憲「檀君認識の歴史的変遷」『檀君—その理解と材料』 ソウル大學校出版部 1994年10月 p.p.141~142

壇君

|| → 夫妻

河伯の娘

|| → 朱蒙

解慕漱

となり、これでは解夫妻と朱蒙は異父兄弟となるが、肝心の壇君と朱蒙は血の繋がっていない、むしろ壇君の系統は夫妻の子孫が朱蒙の系統によって滅ぼされ消滅する。これに対し、柳東植氏は壇君と解慕漱を説明し、「韓国語で桓の音は「황ファン」は光の音である「관クワン」、解の音である「해へ」は太陽を意味する「해へ」で、同じものといえる。そして、雄は男を意味し、漱もその音である「수ス」⁵⁹⁾は同じく男性を意味する。従って、解慕漱と桓雄は同じ意味を異なって表現されているに過ぎない。そして、彼らは共にこの世に降臨した天の子である」⁶⁰⁾と主張している。即ち、桓雄＝解慕漱となり、壇君と朱蒙は父母が同じ兄弟で、朱蒙は壇君の弟となる。これは王暦の壇君の子朱蒙と矛盾し、『三国遺事』の内容と反する。しかし、李恩奉氏が「桓雄は桓因の息子と云う意味だ」⁶¹⁾と述べているように、桓は桓因と合せて考えるべきで、桓＝光とし桓雄＝解慕漱とするのは無理がある。また、解慕漱の「慕」に対する言及もない。

このように、壇君と朱蒙関係を示すのは唯一王暦の記事だけで、本文割り注においてはむしろこれを否定している。即ち、崔柄憲氏が述べるように、『三国遺事』において壇君→朱蒙の継承は明確でない。

そして何よりも、「古朝鮮条」本文に沿ってみれば、「封箕子於朝鮮。壇君乃移於藏唐京 後還隱於阿斯達爲山神」⁶²⁾と、箕子が朝鮮に来ると同時に壇君は隠れ山神となり、古朝鮮は壇君一代で幕を閉じる。即ち、『三国遺事』において壇君継承はない。

壇君の子孫への言及は、朝鮮時代の書『世宗実録』地理誌(平安道 平壤府)⁶³⁾や『東国輿地勝覽』(1486年)⁶⁴⁾から始まり、朝鮮時代の檀君認識で『三国遺事』の

59) 「ス」はオスをあらわす韓国語である。

60) 柳東植「始祖神話の構造」(李恩奉『壇君神話研究』オンヌリ(은누리) 1986年3月 p.108

61) 上掲書 p.74

62) 『三国遺事』卷一 紀異第一 古朝鮮條

63) 「檀君聘娶非西岬河伯之女生子。曰夫妻。是謂東扶餘王。檀君與唐堯同日而立。至禹會塗山。遣太子夫妻朝焉。享國一千三十八年。至殷武丁八年乙未。入阿斯達爲神。今文化縣九月山。(現代語譯)檀君は非西岬の河伯の女を娶った。子供を生み夫妻と名付けた。これが東扶餘王である。檀君は唐堯帝と同じ日に時代をはじめた。禹が塗山で會を開いた時、太子の夫妻を使わした。治國一千三十八年、殷の武丁八年乙未に至り、阿斯達に入って神となった。今の文化縣九月山である」(國史編纂委員會編『朝鮮王朝實録』(影印縮刷版)五 國史編纂委員會 1969年 p.683下)

64) 「檀君娶非西岬河伯之女。生子曰夫妻。禹會塗山。遣夫妻朝焉。後夫妻爲北扶餘王。(現代語譯)檀君は非西岬の河伯の女を娶った。子供を生み夫妻と名付けた。禹が塗山で會を開いた時、夫妻を使わした。後に夫妻は北扶餘王となった」(朝鮮古書刊行會編『東國輿地勝覽』第5朝鮮古書刊行會 1916年

問題ではない。

さらに、問題は三国を統一した新羅と壇君の関係である。ここで、新羅と壇君の繋りが無ければ、壇君が民族の祖としての根拠を失う。あくまでも、『三国遺事』のテキストに沿って考えたい。

3-2 壇君と三国は別個の系統

『三国遺事』における新羅の祖赫居世の誕生を見ると

『三國遺事』新羅始祖赫居世王條：異氣如雷光垂地。有一白馬跪拜之狀。尋檢之。有一紫卵(一云青大卵)。馬見人長嘶上天。剖其卵得童男。形儀端美。驚異之。浴於東泉。身生光彩。鳥獸率舞。天地振動。日月清明。因名赫居世王。位號居瑟邯。時人爭賀曰。今天子已降。宜覓有德女君配之。……理國六十一年。王升于天。七日夜。遺體散落于地。⁶⁵⁾(現代語訳)あたかも雷光のような光が地面をさしたかと思うと、そこに一頭の白馬が跪いて礼拝するような姿勢をしていた。そこへ(みんなが)いってみると、一個の紫色の卵(あるいは青い大きな卵であったともいう)があり、(白馬)は人々を見ると、長く嘶いてから天に上って行ってしまった。その卵を割ってみると、(中から)男の子が出てきた。顔だちや姿が端正で美しい。驚きながらも不思議に思って、その男の子を東泉に(つれていって)沐浴をさせてやると、体から光を放ち、鳥や獣もいっしょに舞い、天地が揺れ動き、日と月とが(ことさら)清明であったので、よってその子を赫居世と名付けた。位号を居瑟邯といった。そのとき人々が祝って喜んでいうには「今天子が降りてきたのであるから、当然徳のある女君を探して配偶者を決めなければならない。……(赫居世が)国を治めること六十一年目に、王は天に昇ったが、その後七日たって、遺体が散って地に落ちた)」

ここには、新羅の始祖赫居世は天帝の子と記されることもなく、また天から降りてきたとも記されていない。しかし、白馬が天に帰ることより、また生まれるときの異常な状況、そして、人々が赫居世を天降った天子と称し、さらに赫居世は死んで天に昇っていることから、赫居世が生まれた卵は天から降ったものと考えられる。即ち、新羅の始祖赫居世は天から降臨した王である。また、赫居世が天降る前から新羅の地に六つの村に別れて住んでいた人々の祖先も、

『三國遺事』新羅始祖赫居世王條：辰韓之地。古有六村。一曰闕川楊山村。南今曇嚴寺。長曰謁平。初降于瓢崑峰。……二曰突山高墟村。長曰蘇伐都利。初降于兄山。……三曰茂山大樹村。長曰俱(一作仇)禮馬。初降于伊山。……四曰嘴山珍支村。長曰智伯虎。初降于花山。……五曰金山加里村。長曰祇沓。初降于

p.190)

65) 『三國遺事』卷一 紀異一 新羅始祖赫居世王條

明活山。……六曰明活山高耶村。長曰虎珍。初降于金剛山。……此六部之組・以皆從天而降。66)(現代語訳)：辰韓の地に昔六つの村があった。その一つは関川の楊山村である。南側にある今の曇巖寺の方面である。村長を謁平といい、はじめ(天から)瓢岩峰に降りてきた。……その二は、突山の高墟村である。村長を蘇伐都利といい、はじめ(天から)兄山に降りてきた。……その三は茂山の太樹村である。村長を俱(一作仇)礼馬といい、はじめ(天から)伊山に降りてきた。……その四は嘴山の珍支村である。村長は智伯虎といい、はじめ(天から)花山に降りてきた。……その五は金山の加里村である。村長は祇沓といい、はじめ(天から)明活山に降りてきた。……その六は明活山の高耶村である。村長は虎珍といい、はじめ(天から)金剛山に降りてきた。……これら六つの村はみな天から降りてきた。

全て天から山頂に降り立っている。『三国遺事』は新羅の始まりを天との関係から語っている。天帝との関係から始めた高句麗とは明らかに異っており、しかも、『三国遺事』において新羅と高句麗 百済を関連付ける記事は一切記載されていない。さらに、『三国遺事』には、『三国史記』のように秦からの亡人の話⁶⁷⁾も、朝鮮の遺民の話⁶⁸⁾も語られない。むしろ、『三国史記』よりも『三国遺事』は壇君そして高句麗 百済と新羅の関連性を否定している。さらに、『三国史記』に見られなかった新羅始祖と天との関係を示すことによって、高句麗 百済の天帝に対し、新羅の正統性を主張しているといえる。

そして、南の地に興った伽耶・駕洛国にも同じことが言える。『三国史記』が三国にだけ話が集中したのとは異なり、『三国遺事』王暦では他の三国と同等に韓半島に興った王朝として歴代の王を記す。この伽耶 駕洛国について、『三国遺事』五伽耶条に

『三國遺事』五伽耶條：按駕洛記贊云。垂一紫纓。五歸各邑。一在茲城。則一爲首露王。餘五各爲五伽耶之主。⁶⁹⁾(現代語訳)按駕洛記の贊によると、紫色の纓が一つ垂れてきて、六個の卵を(天から)降ろした。(その中の)五個は各邑にかえり、1つはこの城にあって、首露王となり、残りの五個は各々伽耶の王となった。

と、伽耶の始祖も天から降ったと記す。五伽耶の始祖は駕洛の始祖と一緒に天から降りてきた卵から生まれた。即ち天から降臨した王である。これらの国は、後に新羅に併合されるが、その始まりは独自のものであった。そして、やはりこの駕洛・五伽耶と檀君とのつながりは示されていない。このように、韓半島南部の新羅系統と壇君とはなんら繋がりは見られない。

66) 『三國遺事』卷一 紀異一 新羅始祖赫居世王條

67) 『三國史記』卷第一 新羅本紀第一 赫居世居西干條「三十八年春二月。前此。中國之人苦秦亂。東來者衆。多處馬韓東。與辰韓雜居。(これより先、中国人たちは秦国の乱に苦しみ、東方へ亡命してくる者が多かったが、彼らは馬韓の東に住みついて、辰韓の人達と雑居していた)」

68) 『三國史記』卷第一 新羅本紀第一 赫居世居西干條「先是。〈朝鮮〉遺民。分居山谷之間。爲六村。(これより昔、朝鮮の移民、わかれて山や谷間に住み、六つの村を為した)」

69) 『三國遺事』卷一 紀異一 五伽耶條

さらに、ここに壇君と高句麗・百済の系統、さらに新羅の系統を比較すれば、

古朝鮮の系統 : 桓因→桓雄→壇君→消滅
高句麗 百済の系統 : 天帝→朱蒙/温祚→
新羅の系統 : 天→朴赫居世→
(駕洛:天→首露)

三つの系統を見ると、古朝鮮＝桓因、高麗・百済＝天帝、新羅＝天とその始まりが異っている。趙芝薫氏は、天帝＝天として、「韓半島の全ての建国神話は、天神と水神との婚姻によって成立する」⁷⁰⁾とし、その同一性を述べ、韓国始祖神話の同一性を説いている。これでは韓民族全体の始祖は壇君を飛び越えて天帝となる。趙芝薫氏は、壇君を部族の英雄神話と規定し、他国のギリシアのアクラス神話、中国の禹神話、アイヌの始祖神話が全て天神と水神の婚姻であったことからの類推であり⁷¹⁾、『三国遺事』の問題ではない。韓国において、高句麗や新羅の始祖神話は天神と水神との婚姻と解す説が多くの指示を受けているが。壇君の誕生は桓雄(天神)と熊女(地神)の天地の結合としてとらえるのが定説であって、趙芝薫氏の説は現在の韓国においても支持されていない。さらに、金香淑氏は、『三国遺事』の新羅中心主義を説明する上で「新羅の始祖については特に釈尊誕生の物語と結び付けられている」⁷²⁾と、天帝の孫である壇君との異質性を説き、天＝天帝として新羅の始祖を天帝の子とするのを否定した。さらに、天帝は仏教において帝釈天であり、天帝＝桓因となるが、天帝でなく桓因としてはじめた『三国遺事』の意味を考えるべきである。即ち、『三国遺事』において、壇君/朱蒙/朴赫居世は別々の祖によってはじまり、お互いの繋がりを示すことはない。

また、李殷昌氏は、「①壇君の古朝鮮の朝鮮は、朝の国と光明を表示している。②高句麗の朱蒙は柳花に光が当たることによって生まれた。③新羅の朴赫居世が生れるとき、雷光のような光が地面をさした。④伽耶の首露神話は、紫色の纓(光明)が一つ垂れてきた。これらは全て共通の天と地の垂直的な光明によって生れた。即ち、これらの神話は太陽神(天神・光明神)を崇拜する思想だ」⁷³⁾と、古朝鮮＝桓因、高麗 百済＝天帝、新羅＝天を同じものと見た。しかし、『三国遺事』においては、壇君一つとってもこれは太陽神崇拜でないことは明らかである。このように、壇君はその後の韓半島の系統につながらなく、『三国遺事』壇君から一つの民族の答えは得られない。『三国遺事』はそこに仏教

70)壇君神話の熊女は地母神として解釋されているが、趙芝薫氏はこれを水神との關連から見ている。(李恩奉『壇君神話研究』オンヌリ(은누리) 1986年3月 p.p.235～238)

71)上掲書 p.p.229～232

72)金香淑「朝鮮神話の源流」2004年度東京大學比較文化博士學位論文 p.p.105～109

73)李殷昌「三國遺事の考古學的研究—壇君神話の考古學的考察を中心に—」(民族文化研究所編『三國遺事研究上』嶺南大學出版局 1984年6月(1983年8月)p.288)

の普遍世界を語っており⁷⁴⁾、そこに一つの民族観はみられないが、中国に対等な古代史観を持ち得たことに、意義を見いだすべきである。

ならば、一つの民族の根拠として『三国遺事』の檀君が今まで取り上げられてきたのか。これは、過去も現在もそうであるように、『三国遺事』だけで檀君を見るのではなく、他の書と合わせ検討することによって、檀君を語ってきたためである。即ち『三国遺事』とほぼ同時期に李承休によって著された『帝王韻記』の檀君(この書から、ダンクンの表記を「壇」君ではなく「檀」君とするようになり、現在ではこれが『三国遺事』以外のダンクンに対する一般的な漢字表記である)と合わせることによって、韓民族全体の祖として檀君を得ることができる。徐永大氏は、この二書を比較しその類似点として、「古朝鮮以後に登場した王朝達は檀君を根とする点」と述べているが、『三国遺事』がそうでないことは既に述べたところである。徐永大氏も自己の主張に自信がないのか、続けて「この点においては、『三国遺事』に比べ、『帝王韻記』がより強調されているのは事実である」と、一つの民族の祖の確たる根拠として『三国遺事』よりも『帝王韻記』をあげている⁷⁵⁾。

4 おわりに

『三国遺事』は、中国正史に著されている韓半島の国々をほとんど記しているが、中国正史にない檀君朝鮮を箕子朝鮮よりも早く登場させ、その時期を中国の始まりと同じくし、これを韓半島の最初の国、韓民族の祖とする。この檀君を語ることにより、韓半島独自の始まりを確認できるのである。さらに、三国の始祖すべて天帝 天と結び付けることにより、より神異なるものとして韓半島の歴史を描くのである。ここに、中国に匹敵する韓半島の存在を確認する。

しかし、『三国遺事』は、韓民族の祖檀君からはじまる檀君→高句麗→百済の系列を示すが、三国を統一した新羅を檀君の系列から排除したため、韓民族全体の祖としての檀君を著わすことはなかった。ここで檀君を『三国遺事』から取り出すことによって、つまり他の書に著された檀君を合わせ新しい檀君の解釈によって、韓民族全体の祖としての檀君が創造される。

『三国遺事』より7年遅れて著された『帝王韻記』に「名は檀君である。朝鮮のあたりの王となった。故に尸羅(新羅)、高礼(高句麗)、南北沃沮、東北扶余、穢貊はみんな檀君の治国である⁷⁶⁾」とある。ここに全韓民族の祖としての檀君が誕生する。しかし、

74) 朴正義「仏教世界観における自己確証」 日本文化学報 36輯 韓国日本文化学会 2008年

75) 徐永大「伝統時代の檀君の認識」(盧泰敦編『檀君と古朝鮮史』四季節出版社 2000年3月 p.p.161)

76) 『帝王韻記』「名檀君。據朝鮮之域爲王。故尸羅。高禮。南北沃沮。東北扶余。穢餘貊。皆檀君之壽也」

『帝王韻記』は短い文章で、これだけでもって韓国古代史を語ることは無理である。即ち、『帝王韻記』の檀君を、『三国遺事』の壇君と合わせ理解することによって、「一つの民族」観が成立する。一つの民族観は、『三国史記』中国に対し独自の韓半島→『三国遺事』中国に匹敵する韓半島→『帝王韻紀』全韓民族の祖檀君と、中世全体の問題として捉えるべきものである。この中世に創造された古代史が、現在において韓国人の古代史観を形作っているのである。

ここで、問題としたいのは、現在の古代史観が中世の古代史観をもとにするものであること。さらに、その核としてある『三国遺事』は、本来の『三国遺事』でなく、中世の檀君を総合した現在の解釈の上に成り立った『三国遺事』、特に壇君神話である。

さらに、この一つの民族の核、韓民族全体の祖としての檀君観は、さらに朝鮮時代の『世宗実録地理志』『東国輿地勝覧』『応制詩註』などに受け継がれ、近・現代に至っている。

これらのものは、後に日本の中世の民族観と比較する目的で行ったものである。

【参考文献】

- 姜仁求·金杜珍·金相鉉·張忠植·黃淇江譯(2003)『註釋三國遺事』I(韓國精神文化研究院) 以文化社
- 姜仁求·金杜珍·金相鉉·張忠植·黃淇江譯(2003)『註釋三國遺事』II(韓國精神文化研究院) 以文化社
- 姜仁求·金杜珍·金相鉉·張忠植·黃淇江譯(2003)『註釋三國遺事』III(韓國精神文化研究院) 以文化社
- 姜仁求·金杜珍·金相鉉·張忠植·黃淇江譯(2003)『註釋三國遺事』IV(韓國精神文化研究院) 以文化社
- 姜仁求·金杜珍·金相鉉·張忠植·黃淇江譯『註釋三國遺事』(韓國精神文化研究院) 以文化社 2003年6月
- 金鍾權譯(1993)『完譯原文 三國史記』明文堂 初版1984年
- 金貞培(1973)『韓國民族文化の起源』高麗大学校出版部
- 盧泰敦編(2000)『檀君と古朝鮮史』四季節出版社
- 民族文化研究所篇(1984)『三國遺事研究上』嶺南大学出版社
- 李基東·李基白(2001)『韓國史講座1 古代篇』一潮閣 初版1982年
- 李基白著;宮原兎一·中川清訳(1971)『韓國史新論』清水弘文堂書房
- 李佐成·姜万吉篇(1999)『韓國の歴史認識上』創作と批評社 1976年
- 李恩奉(1986)『檀君神話研究』オンヌリ(온누리)『韓國古代史研究』博英社 1984年3月(1975年9月)
- 井上秀雄(1982)『東アジア民族史 1 正史東夷伝』(東洋文庫264) 平凡社 初版 1974年
- 井上秀雄(1981)『東アジア民族史 2 正史東夷伝』(東洋文庫283) 平凡社 初版 1976年
- 井上秀雄(1972)『古代朝鮮』NHKブックス
- 白鳥庫吉(1970)『朝鮮研究史』白鳥庫吉全集第三卷 岩波書店 初版 明治43年(1910)
- 村上四男(1978)『朝鮮古代史研究』開明書院

要 旨

韓国において、一般的に『三国遺事』が一つの民族の根拠として考えられてきた。『三国史記』は朝鮮遺民や箕子朝鮮の話を断片的に載せてはいるが、その歴史を三国から始め関心事はどこまでも三国で、それ以前の韓半島をしめすことはない。このため『三国史記』から一つの民族観を見出すことはできない。中国正史においてもそれは同じある。

ここで、その始まりを中国の伝説の聖帝堯と同じ時期に壇君朝鮮から述べる『三国遺事』が注目されてきた。即ち、三国以前を語る壇君が韓半島の祖として注目されてきたのである。しかし、『三国遺事』をテキストに沿って読んでいけば、定説のように述べられている古朝鮮→(扶余)→高句麗・百済の系統も不確で、三国を統一した新羅は壇君の系統から除外されており、ここに壇君が全韓民族の祖認識されていない。

なれば、『三国遺事』の壇君が一つの民族の根拠として注目されたのか、『三国遺事』と同じ時期に李承休によって著された『帝王韻記』の檀君を合わせ考えることによって可能となる。しかし、『三国遺事』の意義は、世界の始めに中国と並び、古朝鮮が建国され独自の世界を持ったことに満足し、そこに民族の自尊心を見つけるべきであり、一つの民族の根拠とするものではない。

キーワード：一つの民族、壇君、檀君、『三国遺事』、
『三国史記』、『帝王韻紀』、中国正史

투 고 : 2008. 5. 31
1차 심사 : 2008. 6. 14
2차 심사 : 2008. 6. 28

住 所 : (570-749) 전라북도 익산시 신룡동344-2
원광대학교 사범대학 일어교육학과
電 話 : 063-850-6523 / 017-409-6944
e-mail : kannan322@hotmail.com